

よそ者たちの愛

テレツィア・モーラ 著 鈴木仁子 訳



土屋勝彦（評）

モーラはハンガリーのドイツ語マイノリティ出身の越境作家として数々の文学賞を受けてきた有力作家・翻訳家である。浩瀚な長編三部作の合間に間奏曲として本作を執筆し、その意味で本書は楽しんで執筆したという。

独特の語り口で、挫折と空虚感を抱いた奇矯な人物たちが主人公となって滑稽で面白おかしく哀しい話が繰り返され、いわゆる「ユーモアとペーソス溢れる」小話が展開される。コック見習の若者が自由奔放なその恋人に振り回されつつ、自分の上司たる女性コックと疑似親子関係を築き、恋人の失踪により虚脱感に陥る話、早期退職した年金暮らしのマラソン愛好者が自分の荷物を盗んだ若者を追いかけて見失い、捕まえて取り戻したと思いきやそれが勘違いで、全財産がなくなるかという不安に駆られるマラソンマンの話、妻に縁を切られて子供に会えるのを唯一の楽しみにしている救急隊員の男が、小学校時代の旧友の死を知り、その妹に会って少年時代を追憶する話など、社会の片隅でささやかに生きる市井の人々が、思いがけない問題や出来事に遭遇し、そこから何か新たな経験や方向性を探って動くが、結局何かポジティ

ブな意義を見出すわけでもなく、読者に不思議な謎とほのかな温もりを余韻として残していく。

主人公たちは皆疎外感を持ち、根無し草ながらひたむきで憎めない。語りの視点が独特で、登場人物の視点と神の視点が交錯し、独白から会話、体験話へと変転するため、読者は登場人物の視点に同化しつつ、語り手の持つ距離感も感じていく。一人称と三人称、内的独白が交錯することで、語りの揺らぎに巻き込まれるのである。

喪失や別離をトラウマとして抱えた寄る辺なきアウトサイダーたち、臆病で内気で不器用な主人公たちが繰り返す物語に劇的な要素は見られないが、それぞれの幸福を追求しつつ「自分の境遇の難しさや自分の弱さに対して戦いを挑む」ととらえ、「世界への違和感を感じることの多様なかたち」が見られるとする（その後のインタビューによる）。考えてみれば、人生はすれ違いの連続であり、人はいつも心の欠落を埋めていく途上にいるものだ。その文体は簡潔ながら歯切れよく、形象のかつ明晰な魅力を備えており、この独特の文体リズムを見事に再現しえた訳文をぜひ味読してほしい。広く一読を願う。なお、東京ゲーテ・インスティトゥートで、昨年 11 月にモーラ自身による本作のオンライン朗読会が行われた。

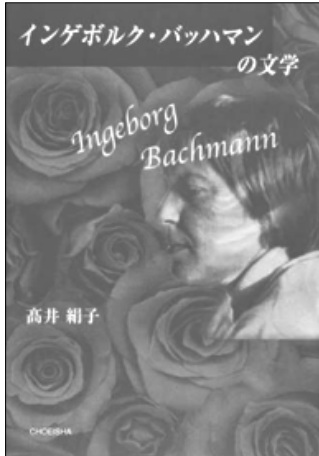
『よそ者たちの愛』（2020 年）

テレツィア・モーラ著 鈴木仁子訳

白水社 本体価格 2900 円

インゲボルク・バッハマンの文学

高井絹子 著



徳永恭子（評）

高井絹子氏の著書『インゲボルク・バッハマンの文学』は、「バッハマンの文学」の内在解釈というよりも、受容史を通して、またツェラン、そしてフリッシュとの恋愛関係に焦点を絞ることによってみえてくる様々な不当性を訴えかけるものである。

バッハマンはデビューまもなく写真誌の表紙を飾り、グループ 47 では広告塔の役目を果たしたが、このバッハマン人気にはジェンダーバイアスがかかっていたことを著者は証明する。ドイツ人男性からなるグループ 47 の他者としての属性、つまりオーストリア人女性としてドイツ文学界に色を添えるという役目が期待され、彼女の詩が持つ政治性は度外視されたまま「女流抒情詩人」というイメージが形成されていく過程が追われる。

詩から散文へとジャンル替えをしたバッハマンは「堕ちた抒情詩人」と呼ばれたが、それは各人が持つ「女流詩人」のイメージに対する裏切りとして捉えられたからである。特筆すべきは、彼女のジャンル替えを詩人ツェランからの離反とみなし、ツェランの「直接的には無神経なミソジニー的表現使用に対する、間接的には民族的体験を盾

にした排他性に対する批判」を含んだ「ツェラン離れのメッセージ」を読み取る点である。

この著書の一番の特徴は避けられがちなフリッシュとの関係性を丹念に追っている点である。フリッシュは自作品でバッハマンと容易に想像される人物を描いた。「フリッシュの『ガンテンパイ』や『モントーク岬』に見られる男と女の間の事柄、すなわち私的な事柄の扱いに対する無神経さ、これはフリッシュのジェンダー観を映し出しており、世論の複雑な反応は時代のジェンダー観の現れである」と著者は述べ、バッハマン作品に潜むフリッシュとの関連性を炙り出し、「書かれる側から書く側へと」意識が変化したバッハマンのフリッシュに対する「異議申し立てのためのテキスト」という側面を露わにする。

バッハマンはスキャンダルに晒され、その作品は常に「私的なもの」との絡み合いのうちに論じられがちだが、「個人的なものの中途半端な隠蔽が、果たしてバッハマン作品の理解に貢献するののかは甚だ疑問である」というのが、この著書を貫く根本姿勢である。こうして「バッハマンの文学」は応答の場を越えて異議申し立ての闘技場として我々の目の前に新たに姿を現す。ツェランやフリッシュ研究からの応答も期待され、その意味でこの著書は開かれた論争の場を提供している。

『インゲボルク・バッハマンの文学』（2018 年）

高井絹子著

鳥影社 本体価格 2500 円

ナチス機関紙「女性展望」を読む—女性表象、日常生活、戦時動員

桑原ヒサ子 著



小野寺拓也（評）

近年、ナチズム研究ではセクシュアリティへの関心が強い。田野大輔『愛と欲望のナチズム』、ダグマー・ヘルツォーク『セックスとナチズムの記憶』、レギーナ・ミュールホイザー『戦場の性』など邦語文献も少なくない。その一方で、残念ながらジェンダー研究は活発とは言えない。かろうじて、ウェンディ・ロワー『ヒトラーの娘たち』が目立つ程度である。その意味で本書は、待望の日本人研究者によるナチズム・ジェンダー史研究と言える。

本書が考察対象とするのは、ナチ党公認の「唯一の女性雑誌」だった『女性展望』である。最盛期には140万部に達し、当時もっとも読まれていたこの女性雑誌を多面的に分析することで見えてくるのは、女性をめぐる諸問題だけではない。ナチ社会そのものが見えてくるといっても過言ではない。実際本書では、ナチの女性政策や母親像だけでなく、出版（第3章）、食糧配給（第4章）、消費（第5章）、女子教育（第6章）といった諸政策が扱われる。女性を軸としながらナチ社会の全体像に触れることができるのが、本書最大の魅力であろう。第4章では、藤原辰史『ナチスのキッ

チン』でも論じられた、戦時下の暮らしや女性に求められた「節約」のありようを、さらに立ち入ったかたちで知ることができるし、ナチ体制下での消費社会の諸相を紹介する第5章の内容は、邦語文献では類書が少なく貴重である。第7章で論じられる、日本イメージとイタリアイメージの違い（イタリアと比べた場合の、日本への微妙な距離感・違和感）も興味深い。

評者がとくに心強く感じたのが、第10章「ドイツ人女性兵士は存在しなかったのか」である。本書でも指摘されているように、「女性は家庭に」というナチの領域分離方針は、戦争準備が始まって労働力として女性が必要とされるようになると、次第に立ち行かなくなる。かつてソ連の女性兵士を「銃を持つ女」として罵っていたナチ体制が、50万人の女性を国防軍補助員として抱え込み、高射砲や投光器、無線機などを操作させる状況は、ナチ女性観の矛盾が極限にまで達したものだと言ってよい。その意味で国防軍女性補助員は、ナチズムにおけるジェンダーを考えるうえで「急所」とも言える論点なのだが、これまでほとんど邦語文献が存在しなかった。依拠している文献が必ずしも最新のものとは言えないのは残念だが、日本の読者にとって今後の「足がかり」が出来たことは大いに歓迎すべきであろう。

本書は『女性展望』という雑誌に丁寧に寄り添い、そこから豊かな具体例を汲み上げている。その意味で、本書の資料的価値は高い。ジェンダーに限らず、ナチ体制について考えるヒントが本書には随所に埋め込まれている。

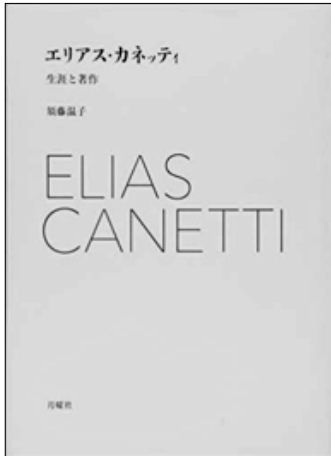
『ナチス機関紙「女性展望」を読む—女性表象、日常生活、戦時動員』（2020年）

桑原ヒサ子著

青弓社 本体価格 4800円

エリ阿斯・カネッティー生涯と著作

須藤温子 著



樋口恵 (評)

本書『エリ阿斯・カネッティー生涯と著作』は著者の20年にも及ぶ研究が結実した大作であり、20世紀を生きたセファルディ系ユダヤ人でありドイツ語作家であるエリ阿斯・カネッティの作品と思想の魅力を余すところなく伝えている。

5部構成の本書の第1部では、20世紀前半のヨーロッパを席卷したオットー・ヴァイニング『性と性格』のパロディとして、カネッティ『眩暈』とその妻ヴェーザ・カネッティ『黄色い街』に描かれた風刺的な反ユダヤ主義的表象が検証されている。

第2部では『群衆と権力』に焦点があてられている。「生き残ること」と「死」があるからこそ権力が出来するというカネッティの思想を踏まえたうえで、カネッティが権力者を生き残る唯一の者であろうとするパラノイアとして描き、シュレーバーとヒトラーを並置していることについて解釈を与えている。

第3部では、「群衆」「権力」とともにカネッティの思想の核をなす「死」に着目し、カネッティの戯曲、旅行記、自伝、断想群、蜂谷道彦『ヒロシマ日記』から、またブリュッゲルをはじめとした

5枚のキリスト教絵画を通じて「死への抵抗」というカネッティ独自の死生観の展開を明らかにしている。

第4部では「亡命作家」としてのカネッティに光が当てられる。オーストリア併合を経てイギリスに亡命したカネッティであったが、彼の自伝には亡命前のウィーンにおける反ユダヤ主義やナチ化について直接的に描かれた箇所はない。これに対してヴェーザの自伝的小説『亀たち』には、ユダヤ人迫害がエスカレートしていくアウストロ・ファシズムが克明に描かれている。エリ阿斯、ヴェーザ、そして亡命作家ローベルト・ノイマンの作品を比較しながら、カネッティが戦後「オーストリア作家」として受容された理由が説得的に示されている。またカネッティ『耳証人』がウィーンで培われた批判精神と17世紀イギリスの「キャラクター・ブック」を念頭に書かれていることが論証されている。そして最後の第5部「言語と故郷」では、自らを「根無し草」、「ドイツ人の客人」と呼んだカネッティにとってのドイツ語、ユダヤ人としてのアイデンティティが問いに付されている。

本書はカネッティの作品解釈にとどまらず、同時代のオーストリアの言説や社会情勢と照らし合わせながら、カネッティの思想の変遷とその生涯を丹念に描き出している。カネッティ研究者にとって間違いなく必読の書となるだろう。また謎に包まれてきた作家ヴェーザ・カネッティの作品の魅力を伝えている点にも価値があるだろう。

『エリ阿斯・カネッティー生涯と著作』(2019年)

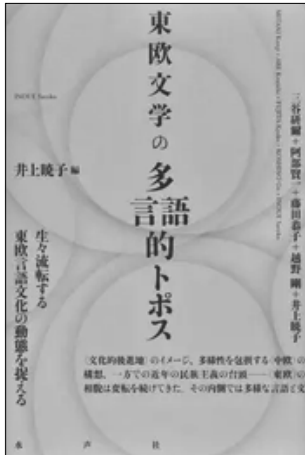
須藤温子著

月曜社 本体価格 3500円

「周縁」と「カノン」

ールーマニア領ブコヴィナのユダヤ系ドイツ人たちとゲーテ

藤田恭子 著



富岡悦子（評）

本論考は井上暁子編『東欧文学の多言語的トポス』に収められた 5 編の内の 1 編である。「編者まえがき」によると、「文化や言語の差異を幾重にも抱え込んだ歴史的空間」として東欧をとらえ、「その多言語状況ないし言語的多様性を背景とする様々な文化的営為を、多層的かつ複眼的に論じることがめざしている」と述べられている。本書は、スラブ語圏文学者が 2018 年 10 月 6 日に主催した同名のシンポジウムがもとになっているが、藤田氏は三谷研爾氏とともに、ドイツ語圏文学者として東欧の多言語的トポスを解明する命題をゆだねられている形だ。

藤田氏には、2014 年刊行の『「周縁」のドイツ語文学—ルーマニア領ブコヴィナのユダヤ系ドイツ語詩人たち』（東北大学出版会）という重厚な労作がある。本書は、ドイツ語圏文学研究のみならず、東欧を対象とするスラブ語圏文学研究に対しても一つの指標をあたえた著作であり、東欧文学の言語的多様性を実証する上で必読の書としてすでに受容されている。本論考は、この著作の基盤の上に置かれた発展形であり、ドイツ文学のカノ

ンとしてゲーテを浮上させることによって、中心とは何かという問いに読者をいざなっている。

ブコヴィナのユダヤ系ドイツ語詩人として、ゲーテとの関連が作品において具体的に挙げられているのは、アルフレート・マルグル＝シュペルバーとモーゼス・ローゼン克蘭ツである。論考の冒頭に、ブコヴィナという「周縁」地域が置かれてきた歴史的状況が実証的に詳述されているため、モダニズムを知る彼らがなぜゲーテを規範としたのかが明確な形で浮かび上がってくる。ゲーテが提唱した万有の普遍性とドイツ語による諸作品は、「四重の悲劇」を生きたシュペルバーやローゼン克蘭ツにとって、「ヒトラーに抗する精神性」として彼らを支えたと主張されている。論考の最後には、ブコヴィナ出身のイディッシュ語詩人イツイク・マンゲルのドイツ語翻訳について触れられており、本論考が、東欧文学の多言語的多様性とゲーテの提唱した「世界文学」との関連への考察に発展することを予感させている。

『東欧文学の多言語的トポス』（2020 年）所収

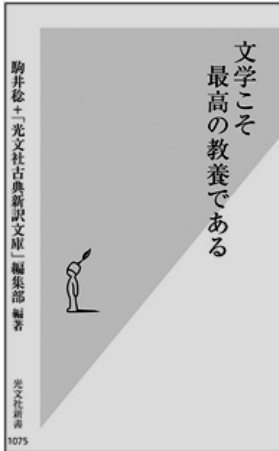
井上暁子編 藤田恭子（他）著

水声社 本体価格 3000 円

ショーペンハウアー『幸福について』

一天才哲学者の晩年のエッセイはなぜベストセラーになったのか？

鈴木芳子 著



太田匡洋（評）

これは、鈴木芳子氏の訳によるショーペンハウアー『幸福について』を紹介する、鈴木氏と駒井稔氏による対談記事である。

哲学に慣れ親しんでいない読者に哲学者の魅力を伝えるのは難しい。エッセイである『余録と補遺』の場合も、カントに由来する哲学体系を背景としつつ、そこにショーペンハウアー独特の巧みな言葉遣いが組み合わさることによって、彼独自の洞察が成立している。それゆえ、彼の主張の要点だけを取りだしつつ、その独自性を失わずにいるのは困難である。そこで、彼の思想、とりわけこの『幸福について』の邦題で知られる「生きる知恵・箴言集」（241 頁）を紹介する際のセオリーとなっているのが、彼の実人生に着目するという方法である。鈴木氏の記事もまた、このセオリーを踏襲することで、ショーペンハウアーの生涯を、家族関係にはじまる数々の有名なエピソードを中心に、親しみ深く紹介している。

記事の冒頭では、ショーペンハウアーの「意志の哲学」の趣旨が端的にまとめられることで、『幸福について』を彼の哲学との脈絡のもとで読むた

めの前提知識も用意され、さらにその具体的なイメージが、大岡昇平の『野火』との関わりのもとでリアリティとともに掘り下げられる。加えて、日本やロシアの文学・思想に対する影響関係も紹介されることで、本書を文学史のなかに位置づけて味読するための観点も提供されている。

ここで、鈴木氏があまり触れなかった側面に光を当てたい。近年のショーペンハウアー研究においてはむしろ、カントの『純粋理性批判』の問題意識を正面から受け継いだ正統派の哲学としての側面（cf. 243 頁）に、改めて注目されている。そのような、「哲学科の人が暗い顔をして学ぶ」（270 頁）に値する、西洋哲学史の一潮流をなした認識論や形而上学の樹立者と、「生きる知恵」を説き古今東西の文学者を魅了した「エッセイとして読まれる哲学者」（267 頁）が、同じ一人の哲学者の首尾一貫した仕事に属することを、評者としては強調したい。この二つのタイプの仕事を、たんなる二足の草鞋ではなく、一つの同じ「ショーペンハウアー哲学」の異なる表現のあり方として成し遂げてみせたところにこそ、今も昔も人々が「哲学者」に期待しつづけている社会的使命（彼がこの言葉をどう評価するかは分からないが）を体現した、まさに現代の私たちが「懷刀」（270 頁）とするに相応しい、ショーペンハウアーの卓越した仕事ぶりを見てとれるように、評者には思われる。

『文学こそ最高の教養である』（2020 年）所収
駒井稔+「光文社古典新訳文庫」編集部 編著
光文社新書 本体価格 1400 円